



# Be Creative



## 問い続けること

3月初旬、GFS I・IIの授業で、探究の成果発表会が行われました。2年生はパワーポイントやビデオを作成し、プレゼンテーションを行うとともに、1年生はポスターセッションの形で実施をしました。先生方にも広く公開された取り組みであり、私も双方の活動に参加しました。

皆さんは、この探究の活動をどのようにとらえてきましたか。3年生を送る会で、卒業生の皆さんが『正解』を歌いましたが、インスタなどを見ると、多くの学校の卒業式でこの歌が歌われています。皆さんの心に突き刺さる中身を持った歌なのでしょう。だとすれば、もう私は多くのことを語らなくても、皆さんと思いを共有することができると思っています。私たち教員も明快な答えのある問いの方が、教えていてとても楽です。「なるほど」と生徒の皆さんにも思ってもらえるからです。ところが、探究の活動に『正解』はまず、ありません。現時点での『納得解』しか、そこにはあらず、情勢が変われば、その『納得解』も『不正解』ということになります。GFSなどの探究の授業を担当する先生も、皆さん以上に悩む日々を送ってきました。着地点が見つからず、先生も頭を抱えます。

私もよく研究会に参加をしました。ある時、探究活動をテーマとした研究会にて、分散会が行われました。数ある分散会の中から『探究』が成功するとはどういうことか』をテーマとする分散会に参加しました。同じような悩みを持つ先生方が集まったのです。様々な意見が出るなかで、立命館宇治高等学校の先生が次のような発言をされました。

「生徒が新たな問いにたどり着いた時かな。あるいは、今より少しだけレベルの高い問いが生まれた時かな。」  
はっと目が覚めるような思いでした。まさに『納得解』。この分散会を選択してよかったと思いました。立命館宇治高等学校は探究活動において全国のトップを走る学校でもあります。「さすがだ！」と感服！

現在では『総合的な探究の時間』と呼ばれているものが、まだ『総合的な学習の時間』と呼ばれていた時のことです。「知多半島にはなぜNPOの組織が多いのか」(現在はわかりませんが、この当時、これは本当のことでした。人口の割合からすれば、東京都に並ぶと言われていました。)をテーマに、中心になって活動している人からその活動のねらいや取り組みについて学ぶとともに、3人ほどのグループに分かれ、10ほどの団体を訪問し、活動に参加する取り組みをしたことがありました。その団体の活動について学ぶとともに、「なぜ、知多半島にはNPOの組織が多いとお考えですか。」とインタビューをしました。団体の中心となって働いている人たちの意見を集めながら、自分たちの独自の学びとも照らし合わせて、その要因として考えられるものを5つ導き出しました。さあ、これが、正しいのかどうか、その確認がしたくて、日本福祉大学の教授であったT先生をお招きして、自分たちのまとめを披露。生徒も私も自信满满。ところが、先生の回答は明快でした。「それは違うね！！」生徒たちは「えー！！」と絶句。何と、先生が「そうだね」と言ってくださったものは、5つのうちの1つのみでした。先生が退席された後の30人の生徒と私の放心ぶりを想像していただきたい。魂は教室の宙に浮いていた。「見事に違ったね…。」「自信あったのにね…。」「先生の説明は明快でわかりやすかったけど…。」納得するしかないか…。」振り出しに戻る気持ちでした。しかしながら、気持ちが落ち着くと、それが少しだけ爽快な気分になっていったことを思い出します。「なぜ、違ったのか」「何にこそ、注目しなければならなかったのか」「何を見落としたのか」「そもそも発想や着眼点が間違っていたのか」「この点を大事にしていたら気づけたのかな」…半年間の探究は決して振り出しに戻ったわけではないかも…。ぼつぼつと語られる生徒たちの言葉の中に、おぼろげながらではあるが、出発時より少し高い次元の問いにたどり着いたように思えてきた。新たな出発点が生まれたようにも思えてきました。「もう一度、取り組んでみたいね。」これが、最後の授業日での私たちの思いでした。



今年の3年生の諸君は、自らの探究の成果を引っ提げて、大学への進学の実績を作り出した人が何名かいます。良きことです。自らの頭と身体を使って学んだものが、結局、最後には自分の『生きる力』となるのである！皆さんの取り組みは私たちに改めてそう教えてくれているように思います。日常の教科学習の中においても、いやいや、教科学習においてこそ『探究』を！次年度、課題としたいことの一つです。皆さん、新たな気持ちで新年度に進んでいきましょう。



# Welcome back ! 伊藤君・臼井君がカンボジアから帰国しました。

## 「カンボジアでの教育活動と文化体験を通して得た学び」 2年生 伊藤颯汰

私はこれまで、他国で教育活動を行うことは非常に大変であるというイメージを持っていた。特に言語の違いは大きな壁であり、異なる言語や文化の中で授業を行い、学習内容を理解してもらうことは容易ではないと考えていた。



実際の活動では、自分たちで一から作成した教材を現地に持参し、それを使って子どもたちに授業を行った。教材にはクメール語の翻訳やイラストを取り入れるなどの工夫をしていたが、実際に授業を行ってみると、それだけでは十分ではないことが分かった。言葉や文字だけでは伝わりにくい部分も多く、身振り手振りを使った説明や、子どもたちの反応を見ながら内容を調整することの重要性を実感した。また、授業の中で見つかった課題については教材の改善も行き、より直感的に理解できるよう内容を工夫することで、授業や教材が少しずつ良くなっていくことを感じる事ができた。さらに、早朝からアンコールワットをはじめとする遺跡を訪れ、現地の歴史や文化について学ぶ機会もあった。遺跡に刻まれているレリーフや彫刻、壁画にはそれぞれ意味や背景があり、当時の人々の信仰や文化が込められていることを知った。例えば、遺跡に残る顔の彫刻の中

には一部が失われているものもあったが、元の形を正確に再現することが難しく、安易に修復してしまうと本来の姿ではないものになってしまう可能性があるため簡単には復元できないという説明を受けた。この話から、文化財を守ることの難しさと歴史を正しく残すことの重要性を学ぶことができた。また、日本では必ずしも悪い存在として捉えられるとは限らない阿修羅が、カンボジアでは「悪」を象徴する存在として表されていることなど、日本との文化や宗教観の違いについても知ることができた。さらに、アンコールワットでは上層階が「天国」を象徴しているとされ、誰でも簡単に登れないように階段が非常に急に作られているという説明も受け、その構造にも宗教的な意味が込められていることに興味を持った。加えて、現地の先生からカンボジアの教育事情について話を伺う機会もあった。家庭の事情により子どもたちが学校に通い続けることが難しい場合もあり、家族の仕事を手伝う必要などから毎年約10%の子どもたちが学校を辞めてしまうという現状があると知った。この話を聞き、教育を受ける機会や学習環境が整っていることの大切さについて改めて考えさせられた。

今回のフィールドワークを通して、私は他国で教育に携わることの難しさだけでなく、子どもたちにどのように伝えれば理解してもらえるのかという教育そのものについて深く考えるようになった。言語や文化の違いがあっても、相手の立場に立てて分かりやすく伝える方法を考え続けることが大切であると感じた。今回得た学びを今後の実践学習や教材づくり、そして将来の教育活動に活かしていきたい。

## 「カンボジア最大級の世界遺産を訪れた学び」 2年生 臼井優星

今回のカンボジアでのフィールドワークを通して、実際に現地に行って学ぶことの大切さを強く感じました。日本で調べたり授業で聞いたりするだけでは分からない、現地の人々の生活や文化を直接見ることができ、とても貴重な経験になりました。特に印象に残ったのはアンコールワットです。実際に行ってみた感想はとても壮大で中は極めて複雑な作りになっていたことです。アンコールワットはヒンドゥー教と仏教が融合した独特の作りになっており、とても神秘的でした。アンコールワット内の回廊では上が天国、2階が審判待ちの人々、3階が地獄と、死後の世界を象徴していることを感じました。また、近くにあるタ・プローム遺跡では橋を中心に右側が神様、左側が悪魔と正反対に作ることで神話の世界を作り出していることがわかりました。そしてこういう



遺跡には崩れている箇所が多く今でもその工事が行われて壊れている場所はまた謎が多く、分からないことがたくさんあるとガイドの人が仰っていました。こういう経験はそうそうにないので、一つ一つを大事にしてまたこういう経験をしていきたいと思いました。



## もう一つの Welcome back !

3月15日(日)に2年生グローバル英語コースの生徒が、2か月間の語学研修を終えて、無事帰国をしました。英語のみならず、多彩なことを学んだはずで、生徒の皆さんのまとめを楽しみにしています。頑張ろう！